

センター通信

(第17号)

責任編集：清水展 呉咏梅

郵便番号：100081 Tel:8424893

1995. 6. 27

<ニューズ>

◇5月27日午後：茨城県鹿嶋町日中友好協会「孫平化文庫友の会」の一行8人が、南京壁修復の祝賀行事に参加した後、北京を訪れ、本センターの孫平化文庫の準備状況を視察した。竹内実主任教授、徐一平副主任、洪慶華図書資料室主任、飛田立史日本側事務室主任が応接し、今後の孫平化文庫の充実・拡大の方策について意見を交換した。一行は、文庫の準備状況に対して満足の意を表した。

◇5月29日～6月3日：竹内実主任教授と徐一平副主任が第11期生の募集宣伝のために、広東と福州へ赴き、それぞれ深圳大学、厦門大学、泉州華僑大学を訪問した。竹内先生が三・四年生の学生に対して「冷戦後の日中関係」と題する学術講演をし、徐先生は当センターの概況について紹介した。

◇6月6日：ベネッセ（福武書店）のキャリア開発センターの6人が当センターを表敬訪問し、中国語能力検定試験を実施する可能性について意見を求めた。

◇6月9日午後：北京外国語大学外事処の主催により、清朝最後の「賢明な王様」といわれる愛新覺羅・葉鈞の邸宅であった恭王府の見学と、柳蔭街周辺の胡同の散策や四合院住居の見学が組織され、先生方7人が参加した。

◇6月12日午後：第10期生の第一回目の中間発表が行われた。

◇6月19日：事務室の寧民治先生と図書資料室の銭軍強先生が募集宣伝のために、広西省と雲南省に出掛けた。

◇6月20日午前：日本国際文化研究センター教授・東京大学名誉教授の芳賀徹先生および研究協力課長の金城孝夫先生が当センターに来訪された。両先生は日文研と北京大学日本研究中心が12月に共催する「東アジア近代化過程の中の傑出人物」と題するシンポジウムへの参加を竹内先生に招請した。徐一平先生と浅野純一先生も同席した。

◇6月20日午後：東京学芸大学学長の連見音彦先生、日向茂男教授、児玉洋祐教務課長が当センターを表敬訪問された。竹内実主任教授、徐一平副主任、浅野純一主任教授補佐と飛田立史日本側事務室主任が応接した。

◇6月22日(～7月21日)：当センター日本語研修コース第9期生30名が日本での研修を受けるために出発した。その間、研修生達は、日本の伝統芸能・生け花・行政機構などの講義を聴講するとともに、企業や高校、大学などねの見学訪問、日本人家庭でのホームステイ、全国各地への見学旅行などをする予定である。国家教育委員会弁公庁副主任、北京外国語大学研究生処の処長斉明敏女史、および当センターの楊室香先生と呉懐中先生が同行する。

恭王府の雑感

小泉 仰

五月末ともなると、北京の日差しは非常に強く、木々の緑に照りつけている。恭王府の池の水も、あまりの暑さにじっとうずくまっているように見える。ここは百三十年前の昔、西洋諸国が銃剣を突きつけて理不尽の談判を強いたといわれる館である。私の想像では、王府の主人は、不利な状況の中で中国特有の話術と巧みな交渉によって条約を妥結させていったように思う。

日本ではその少し前にペリー提督が江戸湾に押し入って、徳川幕府に開港を迫っていた彼の目的は、自国の捕鯨船に中継基地を確保するためであり、さらに日本を中継して清朝中国に経済的・軍事的に進出していく足掛かりを作るためであった。

長い間の閉鎖社会に満足していた日本と中国という両国が、外からのインパクトに激しく揺り動かされ、西欧との対応に明け暮れる日が始まったのである。その後の両国の歩みは、誠に苦渋に満ちたものであった。しかし日本は、封建制度下にあったとはいえ、各藩が多角的な情報収集の中心を形成していたことや、日本の国土も小回りの利く大きさであったことから、近代化への道をいち早く歩むことができた。これに対して中国は、情報収集の中心が少なく上に、巨大な国のゆえに適切で素早い対応を取ることができず、19世紀から80年の間、西欧からの侵略と次いで日本の侵略を受けて苦しみ抜いた。恭王府はそうした歴史の始まりを偲ばせる史跡であった。

友誼賓館の日々

二藤 尊夫

友誼賓館は不思議である。私がこの不思議な空間に初めて足を踏み入れたのは8年前のことであった。当時、今より、はるかに気の短いリー・シーフが、はるかに不機嫌な顔をして、はるかにオンボロな通勤バスで、しかし、今と同じ「バス停」から、われわれ專家をセンターに運んでいた。シーフのオンボロバスを待つ10分間足らずの時間に、毎回、私は強烈なデジャヴュ（既視感）に襲われたものである。そして、その既視の光景が私自身のものでなく、ある創作上の人物の体験であることに気付いた時、私は、中国をではなく、英国を理解したような気がした。

「バス停」のあるロータリーに10分も立っていれば、いやでも、さまざまな人々の往來を観察できる。專家食堂の服務員の通勤姿に、彼女が存外、お洒落なことに気付いたり、某先生夫人が、いつも、決まってこの時間に双楡樹まで買い出しに行くことを知ったり、あるいは、いつもは酒浸りのフランス人記者が、今日は、思いもよらないこの時間に、主樓をめざして真面目な顔つきで足早に歩いてゆくのを見たりするのである。これは、誰の体験だったのだろうか。もとより私の体験ではない。それは、卵形の頭をした奇妙なベルギ

一人の体験であった。彼が足を踏み入れる不思議な空間は、決まって、今、私が立っているこの空間であった。そして、間違いなく、それは、彼をこの世に生み出した若き日のアガサ・クリスティの立っていた空間でもあったことだろう。

もとより、友誼賓館は英国とは縁もゆかりもない。中ソ「蜜月」時代、旧ソ連が在中ロシア人技術者の宿泊施設として、中国に無理矢理作らせたロシア風建造物である。にもかかわらず、友誼賓館のもつこの不思議な空間性は、私に英国を想起させてしまったのである。後に、中国がソ連を「帝国主義」呼はわりする事になるのも故無きことではなかったのかも知れない。

私は、日中友好の使命を担って、北京日本学研究中心にやって来た。そのことは、間違いない事実であり、必要なら、誰の前に出ても、胸を張ってそう言い切る自信がある。しかし、今回、8年の歳月を経て、再び、北京を訪れる気になったのは、もしかしたら、もう一度、「友誼賓館の日々」を送りたいと心の底で思っていたからかも知れない。現実の友誼賓館には夢も冒険もないし、殺人事件もそう滅多には起こりそうもない。あるのは、むしろ、きわめて退屈な日々の方であろう。しかし、心にヒーターパンを残している中年男にとって、友誼賓館は、ビック・ベンの彼方にある永遠のネヴァー・ランドとたしかに「差不多・一様的」であった。友誼賓館の日々は不思議である。

センターの15カ月

清水 展

昨年(1994年)の春学期から今年の春学期までの計3学期間、社会文化論を担当しました。昨年3月初旬にセンターに赴任し、友誼賓館で暮らし始めた頃の北京の街の印象は、正直に言って、かなり悪いものでした。その直前までフィリピンで調査をしており、マニラとは何から何まで正反対の北京の街の風景と雰囲気強い違和感を覚えました。街全体の沈んだ灰色の色調と冬枯れて貧相な裸の街路樹が、こちらの気分まで何だか寒々と暗くするし、乾燥がきつく、しかも三環路が立体交差の工事中であったために土と砂の混じった荒いホコリが始終舞っていてノドを痛め、咳きが止まらず、さんざんでした。

ところが、4月に入って木々の新芽が一斉に吹き出してくると、気分は一新。一日一日と目に見えて濃さと量を増して行く清冽な緑と人々の、特に女性の、あざやかな色合いの服装が元気で明るい気分を引き出してくれました。後はそのまま、すっかり街になじんで、楽しい暮らしでした。国慶節の前に三環路の工事が完成し、同時に双楡樹デパートが開店してからは、買い物その他、生活もいっそう便利で快適になりました。

それに何より良かったのは、学生諸君が真面目で一所懸命に勉強をするので、教えていて手ごたえがあり、講義もゼミも楽しかったことです。

今までに一番強く印象に残っているのは、去年の夏休みの旅行で西域にかけたことで

す 海拔 100メートルというトルファン盆地で44度という気温を体験し、カシュガルからさらに足をのびたバキスタン国境近くのカラクリ湖では、軽い高山病でふらふらとしながら標高3,700メートルという高度を実感しました

カシュガルからハミール高原の端へと車で上ると、標高が3,000メートルを越えてから、ほぼ平坦な土地がひらけてきます。雪解け水の川に沿うように近づいたり離れたりしながら舗装道路が続き、川の両側には湿地や畑、荒地が入り組んで広がり、草地にはヤクやラクダ、羊、の姿、群れ。時たま道端をすれちがうキルキスの農民だか牧民だかの顔は、日焼けの赤褐色でひどく皺だらけでした。道路から数キロか10キロほど離れたあたりから、急峻な山がせり上がり、その頂上付近は純白の万年雪。その上には、フィリヒンの海の青よりもっと透きとおって深い蒼をした空。草地、ガレ場、岩肌、雪、空。空気が薄く乾燥しているせいか、風景のすべての輪郭がかくつきり明確で、色彩のコントラストも鮮やかで明快でした。それなのに、現実感がほとんどなく、シュールレアリスムの絵を見ているような気分でした。

1年以上も北京に暮らしてひとつだけ残念なのは、中国語があまり上達しなかったことです。まあ、これは、自分がまじめに勉強をしなかったことが原因ですから仕方ありません。そのかわり、駄目な父親の分を娘が代わりに頑張ってくれました。小学校を卒業した翌日にやって来て、北京大学の付属中学に編入させてもらい、父娘二人の北京生活を送りました。初めのうちは中国語がさっぱり分からず、授業にまったくついて行けず、登校拒否になりかけたりしましたが、それでも何とか乗り切って、少なくとも日常会話は不自由しない程度になりました。北京で暮らした経験を活かして、彼女がこれから日本と中国との交流に係わっていってくれたらと願っています。